

神戸女学院のクリスマス礼拝のはじまり

茂 洋

はじめに

史料室から「神戸女学院クリスマス礼拝のはじまり」について記すよう依頼されました。この公開クリスマス礼拝は、たしかに私がチャプレンの時に始めた事は事実ではあるのですが、なにしろ40年も前の事ですので、あまり正確には思い出せません。

チャプレン室にクリスマス礼拝のプログラムがほぼ揃っていましたので、それを見てみると、様々な思い出がまるで走馬灯のように浮んできて、中々まとまりそうもありませんが、思い付くまま書いてみますので、その点ご了承下さい。

クリスマス礼拝のこと

キリスト教主義学校として、礼拝を重視する事は当然なのですが、キリスト教カレンダーに従って、イースターとクリスマスとは特に大切な礼典として取り扱います。しかしイースターは、春先で日付が毎年移動する事と、学年度初めと重なる事が多い上に、現実的にも内容的にも難しいので、礼拝を行なってきませんでした。それに比べるとクリスマスは、比較的受け容れやすいので、神戸女学院でも大学と中高部は、それぞれクリスマス礼拝を守ってきました。

特に大学では、音楽学部をはじめ、大学や総務の職員の方々の協力を得て、1972年頃までは、12月の授業終了の翌日をクリスマスの日として午前10時から盛大にクリスマス礼拝だけを守っていました。そこで学生諸姉は、礼拝後それ

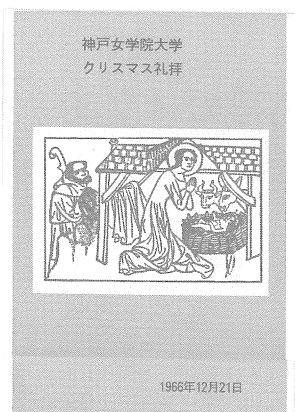


写真1 1966年大学
クリスマス礼拝

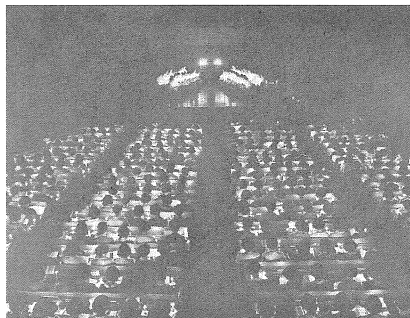


写真2 1967年クリスマス礼拝

それぞれのクラブや友人たちと自由にクリスマスパーティなどを開いていました。年によって、中高部の終業式とかち合う日は、午後1時とか1時半に始めた事もありました。

その頃からすでに礼拝式のプログラム、ステージの造り方、コーラス、オーケストラの位置、式順、学生諸姉の入場の仕方などは、チャプレンと音楽学部 of 指揮者たちと一緒に打ち合わせていました。そのうちにプログラム用紙もデザインするようになりました。1962年には音楽学部のコーラスが Britten の Christmas Carol を合唱しましたので、その楽譜の表紙のデザインをそのまま用いました(写真1)。その後は学生に依頼するようになり、それは今でも継続されていますね。1976年ごろからは、暫く大学生の寺田博美さんに作ってもらっていた事が印象に残っています。ステージは、ソールチャペルから聖壇を運び、中央に据え、コーラスをハの字型に配置した事もありました。その実例として1967年の大学クリスマス礼拝の写真をご覧ください(写真2)。

公開クリスマス礼拝のこと

それは、1972年の大学クリスマス礼拝終了直後の事です。5月に赴任された小宮 孝院長が神戸女学院大学での初めてのクリスマス礼拝に出席されてい

て、祝禱を終えて壇から下りてきた私に、「このようなすばらしいクリスマス礼拝を大学の内輪だけにしないで、一般に公開したらどうでしょう」と言われたのがきっかけになって、翌年から公開クリスマス礼拝を始める事になったのです。

しかし神戸女学院の講堂を、夜間一般に公開する事は大変です。何と言っても、学生、生徒諸姉をはじめ、教職員、一般の参加者の安全と、建物の保安の確認が必要です。このことについては、総務や大学、中高部の職員の方々に責任をもつ事としました。

プログラムは、大学のクリスマス礼拝を基礎にして、それに中高部とPTA有志のコーラスを加える事とし、それに伴ってステージの作り方や電気の配線も検討しました。音楽学部の方野有宏さんが、一手にその責任を担って下さったと思います。

コーラスとオーケストラは、林 達次先生と八代秀夫先生、PTA コーラスは松本寛二先生、中高部コーラスは下田閑子先生が担当、プログラムの印刷などはチャブレン室で行ないました。

検討する必要があったのはそれだけではありません。ローソクを用いますので、その配布と点火の仕方、礼拝後の火の消し方など、綿密に検討しました。特にローソクの点火の仕方については、かなり注意深く取り扱いました。それにもかかわらず、礼拝後椅子や床にはロウが垂れていて、後で職員の方々がそれを取り除くのは大変でした。

また万一の場合を想定して、事務の方々を出入り口に配置していました。特に北側の扉は、式が始まると鍵をはずし、すぐグラウンドに出られるようにしていましたし、ステージ奥の通路も通りやすくするために、椅子や道具類を取りのけていました。消火器もかなり多く配置していました。そして式の間、責任ある人が必ず最後部にいて、注意をはらっていました(以後の公開クリスマス礼拝では私も幾度もその役を担いました。)

問題は、入場券の配付についてでした。当日はオーケストラとコーラスの座席をとるために、一般入場者のための座席が随分制限されてしまい、一定の数



写真 3 2009年大学クリスマス礼拝

しか入場券を発行できませんでした。それは今も同じはずです。たしか入場券は、500枚ぐらいだったと思います。はじめはPTAと中高部生徒の保護者のために、別に200枚渡していました。女学院でのクリスマスの初公開ということで、この時の500枚の入場券の配付は大変で、チ

ャプレン室はおおわらわでした。「クリスマス礼拝の入場券を取るのは、神戸女学院の入学試験に通るよりも難しい」という笑い話が出来たくらいです。入場券の配布は今もチャプレン室が行なっています。

当日の音楽学部のコーラスは Mendelssohn の Laudate Pueri (Motett) と Bach の Cantata 147、合奏は Torelli の Concerto Grosso Op.8 でした。そして祝禱の後、沢内 崇先生の編曲によるクリスマスメドレーが演奏され、最後に Mozart の Alleluia (Mottet) の合唱で締めくくりました。その後出口の所でいくつかキャロルを歌って終わりました。こうして神戸女学院クリスマスの公開が始まったのです。

その後、大学の授業日数のため、クリスマス礼拝のために一日とる事が出来なくなり、大学のクリスマス礼拝を金曜日の11時半から昼休みまでにしたのが1976年の事でした。この頃は、金曜日の10時半から講演の時間として一時間とり、その後再び11時半から授業でしたので、大学クリスマス礼拝の時だけ時間を変更してもらいました。しかし公開のクリスマスは、中高部の終業式も終り、大学の授業最後の日の午後6時半から始める事となりましたので、大学と公開のクリスマスの日がほとんど異なる事となりました。この2つのクリスマス礼拝を同じ金曜日に開くようにしたのは1989年からでした。このお陰で、講堂の設営も、音楽学部のコーラス、オーケストラの人たちも、一日ですむようになったのです(写真3)。

パイプオルガンを用いてのクリスマス礼拝

公開クリスマス礼拝開始翌年の1974年のクリスマス礼拝も大変でした。それは、神戸女学院創立百周年の記念として、講堂の2階にotto社の大きなパイプオルガンが設置されたからです(設立当初このオルガンの設置をめぐる、大問題が起りました。それは、講堂二階半分の座席がオルガンのために削られるためでした)^②。

1974年8月下旬にこのパイプオルガンが完成し、吉田 實先生による披露演奏が行なわれました。そこで、この年のクリスマス礼拝も吉田先生によるバッハの幻想曲ト短調のオルガン演奏から始めました。ところがオルガンの調律不調のためか、ローソクの熱気のせい、オルガンがすこし狂ってしまいました。後で、吉田先生が、「バッハの曲が現代音楽になった」と嘆いておられました。でも途中で、不調のパイプのストップを用いないように調節して下さったのでしょう、クラークのトロンペットボランタリーとパーセルのトロンペットチューンで華やかに礼拝を終える事ができました(これでこのオルガンとトロンペットとが、とても印象的な響きになったので、それからしばらく大学卒業式の退場の時にも、幾年か演奏してもらったと思います)。この時のクリスマス礼拝では、グノーの「照らせや光」などがうたわれました。このプログラムは、『神戸女学院百年史 総説』に掲載されています(p.461)。

講堂のリース

もう一つ特筆すべき事があります。それは、講堂の両側のランプの下に美しく飾られているクリスマスリースです。これは1966年から始まったのです。その頃はまだ日本ではクリスマスリースがそれほど広まっていまませんでしたので、大学生、主として伝道キャラバンの人たちと相談しました。その中の川瀬(杉之原)美智子さんが、阪急タクシーに葉をのせて、私の研究室ま



写真4 クリスマスリース
(1986年撮影)

で運んできたのが始まりです。その頃西宮平木町には牛小屋があって、そこから藁をわけて貰ってきたのです。おもわず、「ワラわせるなあ」と言って、大笑いした事を思い出します。そして女学院の庭の責任を一手に引き受けて居られた職員の佐伯光夫さんが、軸になる輪を竹で作って下さり、後は伝道キャラバンのメンバーで、藁を巻き、紙(それも後に緑色のセロファン紙)で蔽い、それに松の枝をはめ込み、リボンをつけて完成し、ランプの下に飾りました。その後改良に改良が重ねられて、松の枝を差し込むだけになりましたが、現在は松の枝が取れなくなったこともあって、2002年から出来合いのリースになっています。何時も講堂にリースが飾られると、すばらしいクリスマスの雰囲気になりますね(写真4)。現在はチャプレン室が全部の責任をとって下さっているはずです。ステージ上のポインセチアとか、入口の二本のクリスマスツリーを飾るようになったのは、1993年からの事です。

クリスマス献金とクリスマスプレゼント

この礼拝には、献金の項目はないのですが、入口に献金箱があって、参加者有志の方々がかなりの額を捧げて下さっています。この献金は、神戸女学院の学生、生徒、教職員全員の献金と併せて、知能に重い障害をもつ人たちの施設・止揚学園などに送られています。

それだけではありません。毎年山崎にある水上隣保館に収容されている子供たち一人一人にプレゼントが贈られています。^③ある時その指導者と話していた時、この子供たちのクリスマスプレゼントは何時も画一的なものしか貰えないと言われたので、それではその一人一人に女学院から別々のプレゼントを贈ってあげようという事になり、チャプレン室でその子供たちの名前を示して、女学院の教職員、学生、生徒がそれぞれ任意にプレゼントを用意しました。これも始めて、もう40年を越すほどになっているはずです。今も継続している事はすばらしいですね。

同じように、止揚学園の子供たちにもしようとしたのですが、個別のプレゼントではなく、子供たちにミルク代として献金する事としました。これも今な

お継続されていて、うれしい事です。

最 後 に

このクリスマス礼拝が、好評の内に継続されている事はうれしい事ではあるのですが、やはり内容上でも音楽上でも、その時代に適して充実したものとならないと、その意味が伝わりません。何と言っても、クリスマスは永遠の神の愛の御手がキリストの誕生にしめされる喜びを知る時です。その意味でも礼拝の説教者の責任は重いのです。「説教」という言葉は、あまりよい響きではありませんので、「奨励」と言い換えたりしていますが、内容は永遠の愛が主を通じて示される喜びを伝える事です。この礼拝では、わずか10分足らずではあるのですが、説教(奨励)者はそれぞれ最善を尽くしているはずです。

音楽に関しては、音楽学部のお陰で、大変恵まれています。今まで林 達次先生、デヴィッド・ラーソン先生から、沢内 崇先生や中村 健先生らに受け継がれ、中高部でも下田閑子先生から喜多(山本)牧子先生に受け継がれて、その時その時に応じた讃美が、演奏や合唱されている事はすばらしい事です。

そして礼拝の司会者は、できればその全部の流れを知り、しかも礼拝の雰囲気をよくわきまえた方でないといけないのですが、毎年適切な方が選ばれています。中でも特に加藤民雄先生と、飯 謙先生の司会ぶりは印象的でした。

勿論このクリスマス礼拝のために、学院あげて協力体制が続けられている事は、特筆に値しますが、その中でも、チャプレン室の働きは、表になったり、裏になったりしながら、すばらしいものでしたし、今でもそうです。チャプレン室歴代の専任職員の方々^④がそれぞれ最善を尽くしてくれています。神戸女学院の中高大の教育を理解し、むずかしいチャプレン室のあり方を受け止め、個性豊かなチャプレンとかかわりながら、見事に仕事をこなしてこられた事に、ここで改めて感謝し、お礼を申し上げます。

永遠の神の一人一人への愛、いつくしみが、キリスト誕生によって、示される喜びをあらわすのが、クリスマス礼拝の意味です。神戸女学院の教職員、学生、生徒の皆さんがこぞって、その時の力を合わせて、この礼拝を一般に公開

する意義は大変大きいのです。これから、その時その時最善を尽くして、これを守っていった欲しいものです。それと同時に、この礼拝のあり方、説教(奨励)の内容、音楽の選定、装飾のあり方などを、担当者の方々が、鋭意努力して、新しい芸術的スタイルを生み出していった欲しいと、心から願っています。

註

- ① 講堂のパイプオルガンは、阪神大震災の時パイプが全部飛び出したため、ボッシュ社によって、枠組みはそのままですが、中のパイプを全部入れ替え、構造も変えて修復しました。
- ② 当時の原 清理事長らと相談して、一旦パイプを講堂の前面に置く案も検討されたのですが、結局二階に置く原案に落ちつき、そのためその他の座席に補助椅子をつける事になりました。そのため今でもこの補助椅子が、時々音をたてて、困りますね。
- ③ この施設は、牧師であった中村 遥先生が、大阪港(当時は築港と呼ばれていた)の近くで、水上生活者の子供たちのための施設を始められたのが始まりです。戦災で、施設が全焼し、先生は子供たちとともに、この山崎に土地を見つけられて、児童養護施設として発展してきました。現在では保護者を失った子供たちが、150名ほど収容されています。
- ④ 井深(伊藤)三千子さん、そして近森(入)順子さん、光永(池)奈津さん、橋本(松永)千香さんたちで、現在では長谷川千枝さん。

(本学名誉教授)